

まえがき

アフリカの紛争解決や平和構築に対する関心が世界的な高まりを見せている。冷戦終結以降、この問題は国連安全保障理事会の主要議題のひとつとなったが、最近では先進国首脳会議などの場でも議論されるようになった。国際機関、先進諸国政府や援助機関、さらにNGOも、この問題に関与する姿勢を強めている。ここ数年、『ホテル・ルワンダ』や『ブラッド・ダイヤモンド』など、アフリカの紛争をテーマとした映画が世界的にヒットしているが、この問題に関する市民レベルでの関心の高まりを示すものといえよう。今日、アフリカの平和に向けた理論的、実践的取組みが、多様なレベルで求められている。

本書は、アジア経済研究所で平成18～19年度に実施された共同研究会「アフリカにおける紛争後の課題」の最終報告である。アフリカの紛争や平和構築が時事的にも脚光を浴びるなか、2年にわたる研究会では、可能な限り事実立脚し、地に足の着いた議論をしようと心がけた。アフリカでは1990年代に深刻な紛争が多発したが、その多くは次第に収束傾向を示した。紛争の収束には国際社会の多様な平和活動が貢献したが、そうした実践は同時にさまざまな問題に直面している。紛争が収束傾向にあるとはいえ平和の基盤は脆弱で、再発の恐れが遠のいたとは言い難い。執筆にあたっては、アフリカ諸国が直面するこれらの現実——絶望する必要はないがバラ色でもない現実、我々がそこから出発せざるを得ない現実——をきちんと読者に伝えることが大切だと考えた。

アフリカの紛争解決や平和構築にかかわる内容を扱いながら、本書の標題はそうした言葉を冠していない。これは、「紛争解決」や「平和構築」と呼ばれる現象を一步離れたところから観察し、分析する本書の立場を示すため

である。

本書は、「戦争と平和の間」の出来事を扱う。アフリカで武力紛争が起こった後の平和の確立に向けた過程、そしてそこで実施されるさまざまな活動が、本書の分析と考察の対象である。この過程には国際社会が積極的に関与し、平和の果実をもたらすべく重責を担う。そこに生起する多様な事実を明らかにし、その今日の意味や直面する課題について考察することが本書の目的である。

近年アフリカで武力紛争が収束傾向にあるのは、国際社会の関与によるところが大きい。しかし、長期的な平和の確立という観点で見た場合、関与の有効性はそれほど自明ではない。紛争後の社会で、暴力の噴出をとりあえず押さえ込んだとしても、平和と共存に向けての楽観的な見通しをなかなか持てないのである。「戦争と平和の間」にあることは間違いのないにしても、平和に向けて着実に前進しているのか、そこで宙吊りになっているだけなのか、その見極めさえ難しい場合も多い。

そうした曖昧な状況を扱う本書は、何らかの特効薬を提供するものではない。政策に直結する提言が、数多く盛り込まれているわけでもない。本書が焦点をあてるのは、そうした状況にかかわる「事実」である。的確な処方箋を考えるためには問題の所在を知らねばならない、現実を知るところからしか何事も始まらない、という考え方にもとづいて、本書は編まれている。

本書に所収された各論文は、アフリカの「戦争と平和の間」で展開する多様な現実を描き出す。ただし、本書が描くのは、単なる多様性ではない。各論文を読み進めるにつれて、読者はそれらに通底する主張に気づかれることだろう。有効な平和政策を打ち出すためには歴史的な観点からの紛争要因分析が必要であること、紛争解決や平和構築の諸実践は和平プロセス全体のコンテキストに位置づけて初めて評価可能であること、和平プロセスが国際政治と国内政治のせめぎ合いのなかで進行し、したがって双方の分析が必要であること…。必ずしも明示的に論じられてはいなくとも、これらの主張は各論文に通底している。

編者はここ数年アフリカの紛争問題に関心を抱いてきたが、紛争解決や平和構築を体系的に研究してきた者ではない。自己規定すれば、アフリカ研究者としか呼びようがない。2年にわたる研究会で議論を重ねた結果である本書には、地域研究の特徴が色濃く滲み出ているように思う。そこにはおそらくメリットとデメリットがあるのだろう。幅広い読者からご批判やご叱正をいただければ、大変にありがたい。

研究会の運営にあたっては、さまざまな方々にお世話になった。とくに、講師として研究会でご報告いただいた栗本英世さん（大阪大学）、石田淳さん（東京大学）、遠藤貢さん（東京大学）、またオブザーバーとして研究会に参加して下さった皆さんに御礼申し上げたい。

2008年6月

編 者